

Editorial

本欄執筆時、シカゴではASCOが開催中です。今年からTwitterのハッシュタグ#ASCO2017の使用を推奨(というか煽っている?)しているようでハッシュタグの画面が次々とアップされていきます。話題の中心は免疫チェックポイント阻害薬関連で大体6~7割といった印象。これ自体がトレンドとは言いきれませんが、やはり世界の関心は免疫チェックポイント、また免疫療法全体にあるようです。

そんな中、時折「Cancer Drug Costs」というワードが、まるでノイズのように上がってきます。追いかけてみると、くしくもDr. Leonald Saltzのインタビューでした。‘We Can’t Have It Both Ways’: Len Saltz on Hype vs Hope, Drug Costs, and ASCO 2017 (Medscape May 31, 2017)。‘Hype vs Hope」という見出しが強烈です。このインタビューのなかで、Dr. Saltzは「人々に誤解を生むような用語や言葉の使い方に気をつけなければならない」と強く主張されています。その例として、‘Significant’や‘PFS」といった日本でも見慣れたものが挙げられています。インタビューの文脈的には誤読ではあるのですが、このシークエンスを読み、「やはり最後に残るのは言葉なのか」と不意を突かれたような感覚がありました。

日本的な皆保険制度をもたないアメリカでは、患者個人の所得や経済状況によって使用できる保険が異なると聞きます。がんが診断されると、Nurse Practitionerや主治医が「あなたが使える保険はこれとこれと……」と話しつつ、その一方で保険会社の窓口担当者と医療者が直接やり取りをして「やれること、やれないこと」が決まっていくそうです。その際に、医療者と患者の間では、目指すべきところ(治療のゴール)、そのためになにをやらなければならないのか(治療方針)、そしてなにをやるか(薬物療法や手術内容の説明)がかなり具体的に共有されていくといいます。日本に比べてはるかに突っ込んだ話をするそうです。自分の命が、Pay如何で決まるしくみなので、お金を出す側が納得できるまで話をするというのは当然のことのように思えますが、話を聞く限りでは相当のプレッシャーが患者に要求されそうです。告知に耐えつつ、自分の財産で自分の命の行く末を見定めていくというのは、どれほどのものなのでしょう。

しかし、この話を聞いたとき、素直にうらやましくも思ったのです。アメリカ的な個人のあり方がうらやましかったのではなく、お金という媒介物を間に置くことで実現するコミュニケーション——医療者と患者が膝を突き合わせて話すプロセスそのもの——をまぶしく感じたからです。

医療者と患者のコミュニケーションは、未だ誰も正解を出せない難問です。大変なことだと思います。専門出版社というスモールワールドの中で仕事をしていても、コミュニケーション不能な事態に陥ることはしばしばです。「編集者は言葉のプロです」といつか胸を張って言いたいのですが、そんな未来は(私に限っては)そうそう来そうにありません。

脱線しましたが、このコミュニケーションと言葉の問題は、AIの実臨床化が現実味を帯びてきた最近になって、再び浮上してきました。AIに対して生身の医師の最後の武器はコミュニケーションと言われます。確かにそうかもしれません。

しかし、こう思うのです。ネオデジタルネイティブとも言われる世代が成人する頃には、告知も治療のディスカッションも全てコンピュータが担うことになっても抵抗を感じないのではないだろうか? 「あなたはStage IIIの肺がんです」というfact(真実)だけならロボットから言われたほうがよい、と考える人間が生まれてくるのではないかと。

この話は文字通りの空論でしかありません。しかし、最後に残ると言われていた「言葉」すら取り上げられたとき、医療者はなにができるのでしょうか。

ヒポクラテスは「言葉と薬草とメス」があると残しました。21世紀の今頃になって、この言葉が本来のものとは異なる予言めいた意味をもち始めてきているように思えます。がん医療がPrecision Medicineへと進む以上、以前にも増して高コスト体質となるのは自明です。現場の医療者は、お金という問題に今一度向き合わざるを得ません。ですが、それは貨幣としての「お金」ではなく、「お金」というものによって象徴されるなにか、なのだと思います。

そのとき、言葉とコミュニケーションの問題は別の位相で捉えられるのではないのでしょうか。診断や告知はシンプルに、ただfactだけが要求されるようになって、どのように言葉を費やし、どのように考え、どのように伝えるか。命の行く末自体は変わらないかもしれませんが、その道程は少し違ったものになるかもしれない。極めて凡庸な結論ですが、そのときに必要とされるのはfactではなくfictionの力、「想像力」の範疇に属することのように思えてならないのです。お金という最もfactな存在からfictionについて考える。本号の編集作業中、そんなことに思いをはせました。

「Cancer Board Square」編集室 三橋